

西南学院の一貫教育への期待と提言

出席者：小林 史奈（大学院国際文化研究科博士前期課程2年）
田代 裕一（大学人間科学部児童教育学科主任）
寺園 喜基（院長）
中根 広秋（高等学校教頭）
宮崎 隆一（小学校教頭）
横田 哲子（舞鶴幼稚園主任）
司 会：深谷 潤（大学人間科学部教授・舞鶴幼稚園園長）

〈50音順・敬称略、役職は当時〉



司会（深谷）：今年、小学校が開校したことから、西南学院が保育所・幼稚園から大学院までの保育・教育機関の全てを整えることになりました。厳密にはあと3年後、小学校が全学年そろいますので、すべての年齢の子どもたちが学ぶ、総合学園が完成いたします。今はまだ途上ではありますが、小学校の開校と合わせて、この座談会が企画されました。中学校・高等学校の一貫教育は、以前からありましたが、

学院全体の一貫教育について改めてここで考える機会をもって、そしてそれぞれの立場で、一貫教育について、どのような期待、ビジョン、または提言をお持ちなのか、忌憚のないご意見を伺いたいと思います。

最初に、寺園院長が「西南学院における一貫教育への提言」という文書をお示しくさしましたので、それを読んでいただき、その後、補足説明をしてもらおうと思います。では寺園院長

よろしくお願ひいたします。

寺園：これは私が西南学院における一貫教育をどういふふうに理解しているかということ述べたもので、理事会などで共通の認識を得たというものではありません。その意味ではきわめて個人的な理解・提言といえると思います。

西南学院における一貫教育への提言

西南学院院長 寺園 喜基

西南学院は、小学校が今春開設されたことによって、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、大学、大学院と各グレードがすべて整い、いわゆる一貫校になりました。それでは、西南学院における一貫教育とはどのようなものなのでしょうか。以下に私見を述べてみたいと思います。

- ①西南学院における一貫教育は、一人の人が保育所・幼稚園から大学・大学院まで、一貫して西南学院で学ぶ、ということ必ずしも意味しません。そういう場合もあるかもしれませんが、ないかもしれません。中学校と高等学校の関係・一体性は別ですが。
- ②西南学院における一貫教育は、各園・学校が制度的に相互乗り入れをしている、ということではありません。それぞれが独立しています。また、教員もそれぞれで独立しています。中学校・高等学校の教員の場合、また事務局の場合は別ですが。
- ③西南学院における一貫教育とは、それぞれの園・学校の基盤に共通の建学の精神があるということです。
- ④西南学院における一貫教育とは、それぞれの園・学校で建学の精神が感じら

れるということです。カリキュラムにおいて、またカリキュラム以外において、学校文化・伝統において。

- ⑤西南学院は、幼年期から青年期までのどの時期の教育においても、一貫してキリスト教に基づいた教育を提供しています、ということが一貫教育の基本であると思います。

まず最初に、西南学院における一貫教育は、教育を受ける側に重点を置いて考えて、1人の人が保育所・幼稚園から小学校、中学校、高等学校、大学、大学院まで一貫して西南学院で学ぶということを必ずしも意味しないと思います。そういう場合もあるかもしれませんが、中高以外の所の連携はそうではないのではないかというのが一番目です。

それから2番目は、制度的な面に関してですけれども、西南学院における一貫教育は、各園・学校が制度的に相互乗り入れをしているということではないと思います。それぞれが独立しています。予算単位として考えても独立しています。そしてまた教員もそれぞれで独立しています。ただ、これも中高の場合は、教職員も相互乗り入れしており、区別はない状態です。

3番目は、積極的に一貫教育とは何かといった場合に、私は、それぞれの園・学校に共通の建学の精神があるということだと思います。その共通の建学の精神はキリスト教に支えられている、その基盤にキリスト教、キリスト教の精神があると思います。

4番目ですけれども、さらにもう少し展開して西南学院における一貫教育とは、それぞれの園・学校で建学の精

神が感じられる、あるいは教えられるということだと思います。それはカリキュラムにおいて、キリスト教学や聖書の時間、あるいは礼拝・チャペルの時間において教えられる。あるいは入学式や卒業式といった学校行事を通して建学の精神が感じられ、そういうものが学校の伝統や雰囲気を作りだすのではないかと思います。ですから、3番目で言いたかったのは基盤において終始一貫しているということと、4番目ではそれぞれの園・学校でやり方やレベルに応じて建学の精神が教えられる、もしくは感じられるということだと思います。その点において一つの流れがあるということです。

5番目は、まとめて言ったようなものですが、西南学院は幼年期から青年期までのどの時期の教育においても一貫してキリスト教に基づいた教育を提供しています、ということが一貫教育の基本であると思います。

このことと、もう一つあるのではないかと私は思います。それはどういふ人物を育てたいのかという、教育の目標やビジョンにおいて、一体であるということが大切であると思います。こういう人間を育てたいからこういう教育をするという観点で、やはりビジョンを共有しているのではないのでしょうか。そしてそのビジョンは、建学の精神と一緒にすけれども「西南よ、キリストに忠実なれ」という言葉で示されていると思います。

ドージャー先生の先祖はフランスのユグノー*ですが、ユグノーの人たちは、国内において迫害が厳しい中で、「キリストに忠実なれ」と「最後まで

神に忠実に生きよ」という、そういう言葉を語ったそうです。ドージャー先生が、まさに死にゆく最期の時に「西南にキリストに忠実なれと伝えてくれ」と夫人に言われた。その言葉は、単なる思いつきでも、個人の信条、信念でもなくて、もしかするとドージャー先生の中に流れているユグノーの伝統の言葉というふうに見ることができないのではないかと思います。そうしますと、「西南よ、キリストに忠実なれ」というこの建学の精神としての、あるいはスクールモットーとしてのこの言葉は、大きな理想ではあっても、具体的に教育目標といった時に、少し翻訳し直す必要があるのではないかと思います。そして私はそれを小学校のパンフレットで、西南学院小学校が大切にするものとして「平和・命・愛・自由」を挙げました。このパンフレットでは、教育目標として「隣人愛を育む、知恵を育む」と一言で語っているものの中に「平和・命・愛・自由」、そういう価値観の大切さというものが含まれていると思います。教育機関である限り、知恵や知識、技能を伝授するということは前提になると思いますが、そこにキリスト教精神に裏打ちされた価値観で、「平和・命・愛・自由」を大切にするような人間を育みたいと思います。一貫教育においてそのようなことが共通して目指されて、西南学院を卒業した人はどこの局面、どこの部分で西南学院の教育に触れようと、何かこれは共通しており、価値観において何か独特の雰囲気があるなど感じられ、少し他大学の卒業生とは違うなという、その「違う」という

* 16世紀に宗教改革により生まれたフランスにおけるカルヴァン派のプロテスタント。

ところに、先ほど言ったような西南学院の精神が表れていれば、と思います。
司会：寺園院長ありがとうございました。今のお話では5つのポイントがあるということでしたが、さらに、もう1つ加わりまして、6つの観点から一貫教育についてお話いただきました。それでももう少し大きく3つにまとめられると思います。

1つは制度的な観点で、提言の①と②のところに関わってくるかと思いますが、やはり西南学院の一貫教育というのは、下から上にエスカレーター式に自動的にあがっていくのではなく、それぞれが独立した教育機関であるという点が、まず制度的な面として特徴だと思います。2点目は、建学の精神が一貫しているということだと思います。この一貫しているというのはキリスト教に基づいた教育を行う、そのキリスト教というのが建学の精神として基盤にしっかりあるということだと思います。そして、3点目は、ビジョンのことについて話されたと思います。やはりビジョンにおいて一体であると。「Be true to Christ」というドージャー先生の遺言がスクールモットー

になっているのはご承知の通りですが、それを具体的な形にしていくのが課題であって、その非常に代表的な例として小学校の教育理念の説明があったかと思います。「平和・命・愛・自由」を大切にする、そういう人間になってもらいたい、というのをビジョンとして持って、そして教育にあたっていく。全てにおいてキリスト教を基調としているというお話だったと思います。少し強引だったでしょうか。
寺園：ありがとうございます。すっきりしていいと思います。

司会：それではこれからご出席の皆様それぞれ自己紹介を兼ねて、先ほどの寺園院長の提言、それからお話に対する感想も含めまして、お話いただければと思います。では舞鶴幼稚園の横田先生、よろしくお願いたします。

◇提言の感想

横田：舞鶴幼稚園主任の横田です。舞鶴や早緑子供の園の代表ということではなくて、私個人としてお話をさせていただこうと思います。この一貫教育というのは、すごく大きなテーマで、以前



から西南学院としての一貫教育とはどのようなものなのかというのを考えていました。小学校が開校する2年前にワーキングチームに参加させていただいて、数人の中高の先生たちと一緒に保育所・幼稚園から小学校へのつながり、それから小学校から中学校へのつながりということで、1年間何度も話し合いを重ねました。今日また寺園院長から新たにポイントをきちんと示していただき、大変わかりやすく伝えていただいたと思います。幼稚園の現場にいますと、いろんなところでいろんな方から「西南学院の一貫教育とは」と質問を受けます。その中で、寺園院長の提言のように「西南学院の一貫教育は他の学校とは違う」というところをうまく説明ができなかったのが、このような座談会の機会に皆さんの意見を聞きながら学ばせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

司会：どうもありがとうございました。では小学校の宮崎先生お願いいたします。

宮崎：小学校の教頭の宮崎です。私自身が西南学院にお世話になって、まだ1年半くらいで、それまで30年以上福岡市内の公立の小学校に勤めていました。一貫教育というのは公立学校でも言われており、もう流行みたいになっていますけれども、世間一般で話題になっている一貫教育というのは、本当に分かって論議されているのか、と感じることがあります。一貫教育をすれば良い結果が得られるとか、何かイメージが先行しているような気がします。

成長の中で小学生から中学生になるときというのは、新しい世界、未知の世界への変化であり、人間の成長にとって大事な節目であると思います。

そこの変わり目に対応できるだけの内的な力を育てていくということはすごく大事だろうと思います。もし新しい世界に行くときのショックを和らげるためにその接続をやろうということだとしたら、何か間違ってしまうと思います。では本当の意味での一貫教育とは何なのかと言ったら、私は、提言にあるように、「建学の精神で一貫している」ということしかないのではないかと感じています。だから公立学校の場合において、一貫教育の基盤を何に求めるのかというのは非常に難しいと思います。公教育というのはどこでも同じ質の教育を提供するというのが大前提でしょうから、どうしても抽象的な、あるいは一般的なものにならざるを得ない。しかしそれは分かるようではなかなか理解できないのではないかと思います。また、私が個人的に西南学院小学校ですごく大事にしたいのは、やはり知性的な人間を育てていきたい。あわせて理性的な人間もやはり育てたい。しかしそれと同時に「畏れを知る」ということも大事だと思います。全て自分の力で何でもできるというような人間になってしまったら、手に入れたものをどうするのかという方向性が見えなくなってしまうのではないかと。やはり幼年期に「畏れを知る心」をしっかりと育てていきたい、そう思います。

司会：ありがとうございました。では、次に中高の方から、中根先生お願いします。

中根：中学校・高等学校の中根です。自己紹介から始めさせていただきます。30年ほど前、当時男子校であった高等学校に赴任いたしました。教科は国語です。校務分掌では、図書館教育や人

権・「同和」教育などを担当しました。特に、人権・「同和」教育を担当していた時期は、ちょうど本校における変革期、すなわち男女共学となり、中高一貫教育を行う学校となっていく時と重なっておりましたので、性差別の問題や一貫教育における人権教育の課題などに取り組む機会ともなりました。

さて、この座談会に向けてテーマを与えられた時、私は一貫教育ということ、中高一貫教育のように、一人の人が一貫して同じ学校に学ぶことと考えておりました。しかし、寺園院長は、そうではなく、それぞれの園・あるいは学校の基盤に共通の精神があって、それがそれぞれのカリキュラムや学校文化全体の中からにじみ出てくるものだという事を言われました。一貫教育という言葉をもそのような意味で用いるのであれば、西南学院における一貫教育は、既に小学校の設立によって、形の上では完成に近づいていると考えてよいだろうと思います。とはいえ、そのような一貫教育であるとしても、建学の精神という共通の土台に基づいてそれぞれの学校や大学などで行う具体的な教育内容は、幼児から青少年へという発達段階に合わせた課題と対応させながら、さらに検討していかなければならないのでしょうし、制度的な問題として、相互の連携・接続ということも、やはり課題になってくるのではないかと思います。特に、保幼小の接続や、小中接続、高大接続という課題は公立学校でも大きな課題として取り上げられるようになってきているだけに、宮崎先生の問題提起のご趣旨は理解できますけれど、これからの西南学院に大きく問われてくるものではないかと思っています。

司会：ありがとうございました。では大学の方から、田代先生、お願いいたします。

田代：私は、現在、大学の人間科学部児童教育学科の学科主任をしています。そういうところから考えていることなどを少しお話しさせてもらえればと思います。私は西南学院大学に来て、およそ20年です。その間、舞鶴幼稚園や早緑子供の園などには時々お邪魔させてもらって、子どもたちの様子などを観察させてもらったこともありますし、中高には、教職課程主任の頃、教育実習でお世話になりました。今度新しくできました小学校については、他の小学校の調査や、校舎建築あるいは理念の設定というところから参画させてもらいましたので、かなり前の段階から縁があります。現在、私の立場が学科主任ですので、カリキュラム作成が主になりますけれども、大学で一貫教育に関して、どういうふうな人間を育てるのかというようなアドミッションポリシー、ビジョン、そのようなことも踏まえて児童教育学科の人間づくりを考えていく立場にあります。最初に提言への感想ですが、私も寺園院長の書かれているようなことを普段から考えていたので、その通りだと思います。加えて言えば、西南学院というのは制度的なものよりも理念的なものでの一貫性を考えていくべきではないかというのが感想です。ただ、その際に、大きいところの共有はしつつも、それぞれの学校段階あるいはそれぞれの対象に応じた違いもあるので、お互いに理解していくことが今後の一貫教育において必要ではないかなと思います。だから、各学校のそのような違いをよく考えた上での共通性と同時に、もう一

方は「異質」ではなくて「違い」を互いに大事にすることに、西南らしさがあるのかもしれませんが。それから最初に持った感想として、大学の方でも「どういう人物を育てるのか」ということを大事にしていきたいと思っています。それに関連して、私と司会の深谷先生は小学校の開設の際にも教育理念の面での検討を行いました。深谷先生の方から、大きな「平和を創り出す人間」というような理念を出してもらい、私がそれに至る過程としての「真理を探求する」という理念を出し合いました。そして「真理を探求し、平和を創り出す人間の育成」といったことを打ち出したのですが、これは教育理念の明確さからすると、案外よかったです。というのは、そ



ういったレベルでの人物像や方向性のようものが、大学において明確になっているかということ、あまりはっきりしていないような気がするんですね。まさにビジョンの明確化というのはこれからそれぞれの学校で重要な課題になってくると感じています。

司会：ありがとうございました。では最後になりますけれども、実際に一貫教育を受けてこられた小林さん、よろし

くお願いいたします。

小林：現在、大学院の国際文化研究科に在学しております。今日はこのような貴重な機会を与えていただきありがとうございます。西南で一貫教育を経験した者としてのコメントや体験談を、とのことでしたので、恥ずかしながら参加させていただきました。どうぞよろしく申し上げます。私の西南での生活というのは中学校、高等学校、大学、大学院と続いています。また、中高、大学の同窓会活動に参加したり、昨年からは大学博物館で臨時職員として勤務しているので、公私共に西南学院とそこに関わる様々な方に育てていただいていると思っています。今回、寺園院長の提言を学生の立場から読ませていただきました。寺園院長が書かれていたような、西南の一貫教育はキリスト教という共通の精神を基盤にしながら各園や各学校が子どもの成長に合わせて、それぞれのカリキュラムで教育をしている、ということに共感と言ったら失礼なんですけれど、本当にそうだなと思いました。どうしてかという、これは私が大学に進学した時に感じていたことですが、中高の時も大学の時もチャペルでの礼拝や聖書の時間、あるいはキリスト教教育は一貫していましたが、その他のところは少し違う雰囲気を感じました。今思うと、授業の形態が中高と大学では大きく違うので当然のことですけれども。中高では「自分自身を見つめて、自分自身を理解しなさい」と先生たちに言われましたが、大学になるとそれが一変して、自分自身を理解するという枠を越えて、さらに周りの地域社会や世界に眼を向けようということを入学式で言われたことを覚えています。いい意味

でカルチャーショックを受けましたし、
そういった意味で違いを実感しました。



小林 史奈さん

◇連携・接続は大きな課題

司会：ありがとうございます。皆さんの感想の中で、特に共通している部分は大きく3点にまとめられると思います。まず、寺園院長の提言に対するコメントは、建学の精神を基盤にして一貫しているという点。それからそれぞれの園・学校のビジョンや教育理念に関わる部分も一貫しているという点。3点目に関しては、各学校の連携や接続をどうするかということです。これはどうしても制度の話抜きに具体的な話にまで深めていくことは難しい課題です。特に、どこを具体的に連携し、接続していくかに関しては大きく3つの部分で違いが出てくるのではないかと思います。1つは就学前から小学校、2つ目は小学校から中高。そして3点目は中等教育から高等教育、つまり高校から大学に進む時です。その3つの部分で、大きく、例えば入試や選抜、推薦というような様々な制度が介在せざるを得ないと思います。保育所・幼稚園から小学校に関しては、保護者の

様々な声というのが現場に届いてきて、なかなかその辺は、保護者の期待と小学校の考え方の違いというのが現実問題としてあるわけです。ですから、教育理念や精神の部分では一緒であっても、現実問題として連携・接続という部分でそういったギャップや違いというものが存在します。先ほど小林さんから、高校から大学に行った時にカルチャーショックを感じたというお話がありました。やはり、それぞれが独立していて、独自の教育機関であるという点では当然だとは思いますが、連携・接続ということをこれからどう考えるべきかという課題があると思います。あまり司会がしゃべるのはよくないのですが、もう少しだけお話しさせてください。最初の話題に戻りますが、世間一般の一貫教育に対するイメージや期待は、やはり例えて言えばエスカレーター式ではないかと思います。それを裏付ける1つの例を紹介したいと思いますが、今年の8月、朝日新聞のコラムに西南学院小学校の記事が載っていました。「これまで保育園から大学院まである西南学院で、小学校だけが欠けていた。小学校の卒業生は原則的に西南学院中学校に進み、高校までの一貫教育を受けるというモデルが完成した。」と書かれています。いわゆる「原則的に」とは書いていますけれども、これを普通に読みますと、“小学校に入れば高校までエスカレーター式に進学できる。それが一貫教育である。”と解釈されてしまうのではないのでしょうか。もちろん「そうではない」ことが、今までのお話の中でも明らかになっているんですが、マスコミはそうは捉えていない。寺園院長が言われた一貫教育の意味やビジョンとい

うものとは明らかにずれていると言えます。この世間一般の意識のずれと、私たち現場にいる者として、どうこのずれに関わり、解消していくのか。やはりこれが課題であり、すなわち連携や接続の問題だと思います。私としても、この座談会を理念とビジョン・基盤が共通しているということでもとめたかったのですが、現実的に世間の見方に対して、現場の先生は答えざるを得なくなるだろうと思います。そういうことを抜きにこの座談会を閉じるのはもったいないと思うのと、むしろ、忌憚なく、ざっくばらんにいろんなご意見をいただいた方が、今後の学院の一貫教育の充実プラスになるのではないかと思います。皆さんから、ご自由にご意見をいただければと思います。



寺園 喜基 院長

寺園：今、司会者は非常に大切なことを言われたと思います。つまり理念においては一貫しているということ、それは問題ない。しかし現実的な連携・接続はどうかということです。その辺りは、中根先生にもう少し言葉をいただきたいのですが、小学校の開設に中高の先生たちは消極的だったのではなかったでしょうか。その理由は、私の

理解によると、小学校の段階、特に入学時においては学力レベルが計れないので、小学校ができて一貫教育になると中高の高いレベルが下がるのではないかということでした。その点はどうお考えですか。

中根：小学校の設置に中高が一丸となって異議を唱えたという認識はないんです。賛成ではなかった人もいますが、その理由は一様ではなかったと思います。ただ、賛成にせよ、反対にせよ、設置するにあたって当然予想される小中高接続の問題に対してどのように対応していったらよいだろうかという、ある種の戸惑いが共通にあったのではないかと思います。接続に関する明確な方向性が示されていたわけではなかったからです。小中高接続は大変重要な問題ですので、今後小学校の先生方も交えてしっかりと検討していかなければならないと思っています。

◇大切な人間としての土台づくり

宮崎：我々は、西南学院中学校での学習についていけるだけの学力をつけていこうというのは皆で認識し合っています。しかし、大切なことは、そのためにどうすればいいかということです。自学というか自分で学ぶ力をつけていかなければならない、非常に抽象的な言い方になるけれども、いろいろな意味での基盤をしっかりとつけていけば、伸びていくという考えのもと、頑張っているところなんです。だから、入学説明会では、「教育というものは家庭と学校の両輪で進めていくものであるけれども、いわゆるペーパーテストのような見える形での学力だけを強く望んでいる、西南学院小学校では共通理解

に立てません。」ということを上申上げています。私の経験から言えば、人間としての土台をしっかりとつくってあげれば、子どもの学力も伸びていくと思います。逆にいくらドリルなんかで鍛えても、考える力の元になるものが育っていなければ、後伸びはしないので、そこはしっかり取り組んでいきたいと思っています。その上で、どう具体的に接続していくかというのはこれからの課題だと思います。

司会：そうしますと、制度のことについては、具体的にこれから、ということでしょうか。

宮崎：そうですね。ただどういう制度になっても、子ども一人ひとりにとっていい結果になるように、現段階ではまずは足元を固めるということです。

中根：一貫教育の課題の一つに学力の問題があります。西南学院中学校に入学する生徒たちは高い学力を持っていますが、それでも3年間で学力に多少の格差が生まれます。また、少数ですが、教室に入れない、あるいは学校に来ることのできない生徒もおります。そのような生徒たちを高校にどのようにつなぐかが大きな課題です。中学から高校に進学したものの、進級という壁を

乗り越えることができず、学校を離れざるを得ない生徒たちに関しましては、心が痛みます。キリスト教学校における一貫教育とは、どのような生徒たちをも受け入れて育てていくことがあるべき姿であるとすれば、そのような少数の生徒たちにどのように対応していくのかが問われます。単純に学力や成績だけを基準にして接続を考えることは寺園先生が言われる一貫教育と矛盾することになるからです。

司会：ありがとうございます。中高での学校生活を実際に経験された小林さんは、今の中根先生のお話を聞いてどう思いましたか。

小林：お二人の先生のお話をお伺いして、知識を得ることも大切だけれど土台づくりが必要だと思いました。その土台づくりにどれくらいの時間がかかるかは子どもによってそれぞれ違うと思います。中高で自分のやりたいことを見つけられる子もいるし、そうでない子もいる。私の場合、中高の時に、勉強する意味をまだ自分自身で見出せないところがあったんですが、高校3年生の時に西南大のある教授にとっても魅力を感じて、西南大に進学しました。だから私は、いわゆる土台づくりが大学1年生くらいまでかかり、そこで初めて「こんなに勉強というのは意味があるんだ」と分かって、そこから勉強し始めたので、大学院までかかったんだと思います。また、学部時代に感じたことですが、他の学生を見ると、勉学をする際、謙虚な態度を取れる人とそうではない人がいるんですね。一人で何でもできると思ってしまう子どもは危ないというようなことを宮崎先生もおっしゃっていましたが、これからの世の中は一人で問題を解決して、一人



中根 広秋 教頭

で成功して、一人で活動するというのは非常に難しい。勉学もいろいろな人と協力し、多くの人の意見を聞きつつ、人間関係の中で成り立つものではないでしょうか。そのような姿勢は、やはり土台づくりの時期に育まれるものだと思います。

宮崎：私も公立の小学校で30年以上、仕事をしてきましたが、教育委員会でも生徒指導の担当だったので、いろんな事案に遭遇しました。問題行動を起こした時に「なぜいけないのか」という、いわゆる説諭をします。やはり子どもに振り返らせて、自分で自分自身をコントロールできる力を育てていかなければいけないと思うんです。それを考えさせていくと、「罰を受けるから」とか「怒られるから」などという理由ではなくて、やはり自分の内面の「恐れ」というか自分の存在を超えた者との対話をしていかないとなかなか難しいというのをすごく感じました。人が見ていようと見ていまいと本当に自分はどういうことをしていいのだろうか。そうなった時に、どうしても自分を超えた存在となると、宗教に限りなく近づいていくんです。だけど公立学校の場合は特定の宗教を持ち出すわけには行かないので、その辺に限界があると感じました。人格が形成される時期に、そのような自分を超えた存在というものを意識させていくことは、とても大切なことではないかという気がします。学校教育という枠組みの中で考えた場合に、宗教に根ざした教育があって、それが一貫教育として思春期までそういう環境の中で過ごしていくというのは大きいと思います。



司会：ありがとうございます。土台づくり、特に宗教教育、「恐れを持って」という部分が非常に基礎として大事であるとお話だったと思います。舞鶴幼稚園の方でもよく土台づくりという言い方で保育を説明いたしますが、横田先生その点についてはいかがですか。

横田：宮崎先生が人間としての土台づくりが大切とおっしゃいましたけれど、その土台の根っこ作りをするのが乳児・幼児期だと思っています。近隣の幼稚園では早期教育ということで、知育をたくさん取り入れています。私たちはその前に、遊びの中で豊かな感性と人と関わる力、そしてしっかりとした身体を育てていこうという保育をしています。根っこの部分は目に見えませんが、「ひかりのこ」として大きく成長してほしいと願っています。少し戻って接続の話になりますけども、小学校が開校する前から、入園説明会のたびに「幼稚園と小学校は別の物です。推薦・優遇措置は特にありません」と繰り返し保護者には伝えてきましたが、やはり期待は大きいんですね。そして私たちも、早緑や舞鶴で、それこそ小さい時から神様に守られ、キリスト教保育の中で育ってきた子どもたち

とその保護者が望めば、西南学院小学校に入学できればいいなという願いを持っています。送り出した卒園生のお母さんたちから「舞鶴幼稚園で基礎作りをしていただいたおかげで、今、小学校でその力を伸ばしています。舞鶴で本当によかったです」という声を聞くんですね。舞鶴幼稚園と西南学院小学校をうまく接続する部分があれば、子どもたちの持っているものがもっと生かされていくんじゃないかと感じます。



横田 哲子 主任

司会：ありがとうございます。田代先生、教育学の観点から接続のことについて、どうお考えですか。

◇一貫教育と アドミッションポリシー

田代：これはどちらかというと教育学の観点というより、制度やシステムの問題です。この座談会ではっきりしたことはなかなか言えないと思います。我々が知らなければならないことは、そこに入ってくる学生や生徒、児童などがどんな経験や考えを持っているのかをもう少し考えていくことではないでしょうか。今まで私などは、大学だ

と西南中高から来て、ある意味ホームグラウンド過ぎて、階段がなく、下手するとそのまま緊張感や自覚もないまま学生生活が終わってしまうということが怖い、ということしか思っていませんでした。実際、生徒にどのような経験や考えがあって、そして我々が用意しているものをそこにどのように生かしていけるのか。我々ももう少し努力しなければならぬと反省させられました。

司会：田代先生のお話は、いわゆるアドミッションポリシーの部分に関わるお話でしたが、入学してくる人がどんな経験や考え方、価値観を持っているのか分かれば、ある意味では受け入れやすいのではないのでしょうか。

田代：そうですね。自分はここだったら伸ばせるなという判断をしてもらって、受験生にも来ていただきたいし、我々も教育のポリシーやビジョンをきちんと示してそれにどう応えるのか、明確にしていかないといけないですね。

司会：やはり、それはたくさんの人たちが西南学院に期待して入ってくる。しかし、一人ひとりを厳密に丁寧に見ていく、というわけにもいかないところもあって、そこはやはり課題にも感じますけれども、中根先生そのあたりのことはどうでしょうか。

中根：そうですね、一貫教育を行う学校への志願者やその保護者の期待としては、やはり内部進学への期待が最も顕著なものとしてあると思います。無条件で、あるいは一定の条件を満たせば無試験で進学できるということは、大変魅力的であると思います。内部進学が可能になりますよということは一貫教育をアピールする場合の重要な要素

です。ただ問題は、志望する生徒や保護者がその学校をどのような点で評価しているかということです。西南学院を例にするならば、もし、志願者や保護者の評価が、進学率あるいは学力的に評価の高い学校のひとつであるということにとどまるのであれば、そういう人たちに対し建学の精神に基づいた西南学院の一貫教育のビジョンを明確にしていくということが必要だと思います。

また、中高の一貫教育においては、一貫生ばかりでなく、他の中学から入学してくる一般生を大切に、一貫生と一般生との出会いを一貫教育の深まりの契機としていくこともとても重要なことです。現在、本校の高校生の半分は他の中学出身者です。中高6年間を同じ学舎で過ごすことは、本校の教育への理解を深めるためにも意義のあることです。西南学院高等学校に期待して新たに入学してくる一般生との出会いが相互により影響を与えあうということも申し上げておきたいと思えます。

司会：ありがとうございます。時間がなくなってまいりましたが、私は「一貫教育についてこうあるべきだ」という結論を導き出そうと最初から意図はしていませんでした。ただ皆さんが、それぞれの立場で一貫教育の意味を別の先生方の考えを聞くことによって、違う次元に深めることができたいと思っております。残りの時間をまた一人ずつ伺おうと思いますが、皆さんにとってこれからの西南学院の一貫教育というのはどうあるべきなのか、そのビジョンについて、改めてお話していただければと思います。



司会 深谷 潤 教授

◇自分の中に「西南」が生まれる

小林：たくさんの話が飛び交っていて、とても私には一貫教育のあるべき姿などは語れないんですが、一貫教育の経験者として、私が学んだことを1つ挙げさせてもらおうとすれば、何よりも人の和を大切にするという姿勢でした。最初に寺園院長の提言で、西南は各園・各学校にそれぞれ独立した部分があり、制度的な面で一貫しているのではないというふうにありましたが、制度的な面ではなくとも、人間関係の交流は可能だと思っています。ちょうど、大学博物館でも「せいなんこどもワークショップ」を始めていて、主に人間科学部の学生がボランティアとして参加し、地域子どもたちと一緒に大学博物館でワークショップを行っています。他の世代の人や違う環境にいる子ども同士、生徒・学生同士がつながることができるというのは、ポジティブな面があると思っています。例えば、中高の場合、部活動も中学生と高校生と一緒に練習する。それは一貫教育以外ではできないことであって、中学生は、毎日高校生と一緒に練習するとレベルが上がり、目上の人への礼儀作法

などを体得します。高校生からすると、年下を教える時の注意や配慮の仕方などを実践的に学べます。また、私が感じる西南スピリットというのは、自分が西南に属するというよりも、「西南が自分の中に生まれる」というイメージがあります。その西南スピリットがあるから、たとえ他の環境で生活するようになって、仲間や友達の和を大切にしたいという思いになるのではないのでしょうか。幸い西南には、田尻グリーンフィールドや大学博物館など、誰もが自由に交流できる財産もある。それらを活かしながら、人の和を大切に、次の100年も西南が輝いていることを祈っています。

司会：小林さんは、本当に西南が好きなんですね。

一同：(笑い)

司会：では田代先生、お願いします。

田代：確かに一貫教育の一貫とは理念のことだと思いました。接続というのは制度やシステムの問題で、また連携は具体的な活動などで、この3つをそれぞれレベルが違うことではありますけれども、それぞれを進めることが必要だということがまず1点です。それともう一つは、もっと学内の連携が必要じゃないかと思っています。せっかく西南にも小学校ができて、いろいろな資源や人、さまざまな経験というものが蓄積されてきているわけです。そういう意味で我々も学外との連携もしていますが、これからはもっと学内の活動の局面で連携していけば、まさに一貫に近いものが出てくるんじゃないでしょうか。例えば「学内連携推進室」とかね(笑い)。当たり前のようにだけど、案外これが難しいのかもしれない。その大切さはただ単に相互に役に立ち

合うというようなことだけではなくて、やはり、理解が深まることが大きいと思うんですね。例えば舞鶴の子は小学校に行った時、どんなところで活躍するのか。でも、躰に厳しい先生だったら最初は苦勞するかなとか(笑い)。子どもたちが本当に生き生きとするような活動やカリキュラムは何かということイメージしやすくなるでしょう。つまり、伸びていく道筋のようなものが見えてくるように、相互に連携したり理解しあったりするような活動が盛んにならなければいけないと思います。ただ、それがなかなか進まないのは、人手が足りないことが大きいので、そういうところをバックアップしていただける体制を作ってもらえれば、表面だけでなくそれぞれが抱えている事情がより深く見えてくるんじゃないかと思っています。だから、どこまでできるかわからないけれども、そういう部局があるといいのではないかと感想を持ちました。

司会：ありがとうございます。学院内の連携が大事だという点でお話いただきました。貴重なご意見ありがとうございます。それでは、中根先生、よろしくお願いします。

中根：西南学院の一貫教育に期待するものとして、三つ申し上げたいと思います。一つは、西南学院の一貫教育は異質性を排除するようなものであってはならないということです。ともすれば、日本社会は同質性を尊び、異質性を排除しがちです。しかし、そのような異質性の排除は人と人との出会いの機会を阻みます。人は異質なものととの出会いの中で成長し、新しくさせられます。同じ学校の中に性や個性の違う仲間がいる。また、数は少ないですが、民族

や文化を異にする友達がいる。そのような自分とは異質の仲間と共に、あるいは、その仲間とのコミュニケーションを通して自分自身を育てていくということがとても大切です。違いを認め合いながら成長していくような、そういう一貫教育を目指していく必要があるのではないかと思います。

もう一つは、表現が適切ではないかもしれませんが、若者の閉鎖性に手を差し伸べる一貫教育でなければならないということです。不登校とか引きこもりなどに象徴されるような若者の閉鎖性というのは、ある意味では普遍的な特質であり、アイデンティティの形成過程において避けて通ることのできないものではないかと思います。そういう若者に手を差し伸べ、閉鎖性の奥にある関係性を求める心を養っていくということがとても大切だと思っています。西南学院の小中高大の各部署には常勤のカウンセラーがおりますが、カウンセリングの充実ということはそういう課題に応じていくためにもとても大事なものだと思っています。

最後に、各学校の接続のあり方、連携のあり方についても、やはり学院らしい形を整えていく必要があるだろうと思います。田代先生が学内の連携を強化する組織や委員会をとというお話をなさいましたが、とてもよい提案だと思いました。

司会:ありがとうございます。では宮崎先生お願いします。

宮崎:小学校はスタートしたばかりで本当に課題がたくさんあると思うんですけども、私はずっと一番に思ったことは、西南学院小学校の歩みの中で、小学校の建学の理念と、世間一般の保護者が期待するものとは必ずしも一致は

しないだろうということです。現実と理想の折り合いをどうつけていくのか。これは今でもその真っ最中にあるし、これからも大きな課題だと思います。そして一貫教育に限ったことではありませんが、やはりこうすれば全て上手くいくというのは恐らくないでしょう。何をやってもいろんな問題点が出てくるだろうから、そのことを踏まえた上で、まさに建学の精神、あるいはキリスト教主義教育ということを考えながら悩んで、試行錯誤していくしかないだろうと改めて思いました。

司会:ありがとうございます。では横田先生よろしくお願いします。

横田:私が座談会に参加していいんだろうかとドキドキしながら話に加わらせていただきましたが、寺園院長の提言や皆さんからいろいろなお話を聞きながら、整理ができて、すっきりしました。制度と、精神と、ビジョンというところで、同じものを求めている、というところが再確認できたと思います。先ほどから連携ということが出ましたが、幼稚園にも実習や研究のために高校生や大学生がやってきます。一部の学生とはありますが、子どもたちと交流を持っています。そして、そのお兄ちゃん、お姉ちゃんを見ながら、子どもたちの将来を見ていけるということもありますね。今、保育所、幼稚園から小学校への連携が重視されていますが、小学校の先生たちから学ぶこともたくさんあると思います。どういう形で子ども同士の交流、それから教師同士の交流が持てるかなと考えていますので、この場を借りてよろしくお願いします。それと、幼稚園のお母さんたちは、子育て真っ最中なのですが、お母さんたちもやはり子どもと一緒に

育って行ってくださっているんだなと感じます。子どもたちが小学校に行き、中学、高校とそれぞれの学校に行った時にどんな親になっているのか。そういう将来的な展望を見ながら、毎日お母さんたちと向き合っているところです。本当に大変良い機会を与えてくださったことに感謝いたします。

司会：どうもありがとうございます。それでは最後になりましたが、寺園院長、よろしく願いいたします。

寺園：私が最後に申し上げたいことは、特に一貫性ということが目に見えるような形になった時に、西南学院の方針や立場と、世間一般の期待、評価とのある意味での齟齬みたいなことが、特に接続ということをめぐる出てくるだろうと思います。知育といいますが、学識・知識・技能の訓練とそれを伸ばすということは当然としても、それだけではないという、価値の教育ということ。建学の精神に基づいた生き方の目標であるとか人生の意義などをめぐる価値観、それが大事だということを西南学院は大切に、そちらの方をもっと強調したいと思います。それを各世代にわたって教育したいと思っているわけですが、私はそこで大切なことが2つあって、1つは、保護者の教育、特に母親教育がとても大事ではないかという気がします。ですから、母親もしくは保護者に対して、西南学院の教育はこうなんだ、と教える。そして、それは子どもたちだけでなく、保護者の方々ご自身の豊かな生き方に通じるのではないかと思います。ですから、教職員がいて、園児、児童、生徒、学生がいて、その向かい合いだけでなくその周囲には、保護者がいるということが大事だと思います。それから

もう1つは当然、同窓生もいるということは見逃してはいけないと思いますね。ですから、学院の創立以来、今まで西南学院の教育をしてきて、世間の人々が西南学院を見るとしたら卒業生を見るのではないかと思います。そして卒業生はいろんな問題があったとしても、やはり西南学院の精神のそれなりの具現化だろうと思います。そこで、同窓会活動というのは建学の精神を語る時に忘れてはいけないファクターでしょう。そうしますと、学内連携、学外連携、保護者、同窓会、そういう大きなつながりの中で西南学院の教育というのは流れていくし、進めていくべきじゃないのかと、そんなことを感じさせられました。

司会：寺園院長、ありがとうございます。本日は「西南学院の一貫教育への期待と提言」というテーマでいろいろなご意見、提言を語っていただきありがとうございます。同じ西南学院とは言え、このような形で顔を合わせる機会はありませんでしたが、これも百年史編纂委員会の企画により実現したことです。先ほど小林さんが言いました、「西南が自分の中に生まれる」という言葉が、西南スピリットを表現する際に、すごく響いた言葉でした。全てのグレードの子どもたち、若者たちに西南が心の中に生まれるような、そういう一貫教育ができれば、本当にこれからのビジョンを具体的にしていけるのではないかなと思います。本日は本当にありがとうございます。

◆この座談会は、2010（平成22）年11月29日（月）に西南クロスプラザ2階ゲストルームで実施されました。